

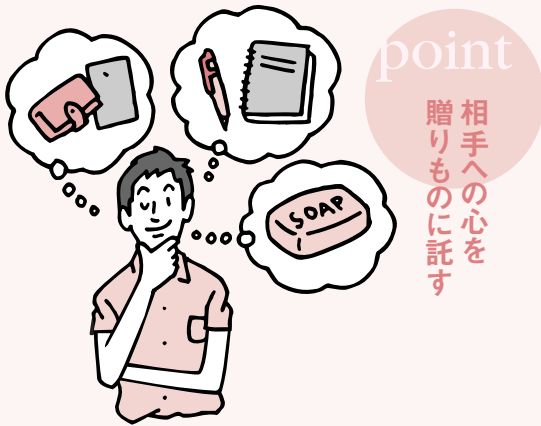
# 贈りものの編

人が人を思う心。その心が日々の暮らしの中で育まれ、かたちとなって根付いているのが、マナーや習慣です。このコーナーでは、その「おもいやり」にフットをあてて、シリーズで紹介していきます。今回は、おもいやりの心が生んだ、日本の美しい贈答の習慣について、その起源や心遣いのポイントを中心に紹介する「贈りもの編」講座です。



## 贈りものの原点は「心を贈る」こと

さりげない心遣いで、贈りものがより素晴らしいものになります



point

相手への心を  
贈りものに託す

贈りものは、相手への心を形に表したものです。心とマッチした品を選びましょう。たとえば「くつろぎ」の印象を贈るには嗜好品が、「清潔」のイメージを伝えるには石鹸などがピッタリ。新入生に筆記用具、新社会人に名刺入れなど、新生活を期待させるものもいいですね。

point

タイミングが大切な  
お中元・お歳暮



お中元は7月上旬～中旬、お歳暮は12月中旬～下旬に贈るのが最適ですが、その品がどう利用されるかを考えてタイミングを決めるとなおベター。お正月用のお酒など、先方でも準備するとと思われるものは、前もってお贈りすることを伝えるとさらに喜ばれます。

正月のお年玉から初夏のお中元、年末のお歳暮にいたるまで、日本には「年のうち何度も」贈りものを「をやりとりする行事があります。さらにいただいたお祝いに」お返しをすることもありませんが、こちらも世界では珍しい習慣。たとえば結婚式の引き出物や内祝いといった行事は、欧米には見られないようです。日本人は、贈りものの好きな民族だといえるでしょう。

このような「贈答の文化」は、お互いを支えあっていた地域社会が生み出したものです。冠婚葬祭や病気の見舞いには食べ物やお金を提供しあい、余ったものをお返しとして配るなど、もちつもたれつで暮らしてきたものが、いつしか感謝の気持ちと今後の変わらぬ関係発展を願う贈りものやお返しし習慣に変わり、現在に受け継がれてきました。

こうして発展してきた贈答の文化も、ライフスタイルの変化とともに少しずつ形を変えています。はじめは相手を直接訪問して渡していたものが、やがてデパートなどのギフトにとってかわり、手紙や電話などで簡単なあいさつをかわすようになりました。さらに最近では、手軽なパソコンの電子メールや携帯

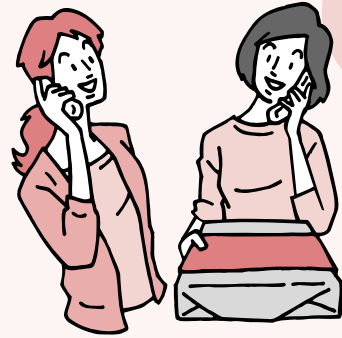
point



さりげない品を選ぶ  
心遣い

病気のお見舞いに鉢植えなど、広く知られているタブーのほかに、趣味性の強いものや肌に直接つける品なども避けた方がいいでしょう。一般的には、日用品や雑貨類、食品などさりげないものが喜ばれます。奇をてらいすぎないのも、贈り手のマナーなのです。

point



嬉しさを分かちあう  
リアクション

贈った品が喜んでもらえる、こちらの気持ちも受け入れられたようで嬉しくなりますね。親しい間柄の場合、受け取ったその場で包装をとくこともあります。開けた瞬間の喜びは贈り手にも伝わるもの。喜びを分かちあえば、お互い記憶に残る贈りものになるでしょう。

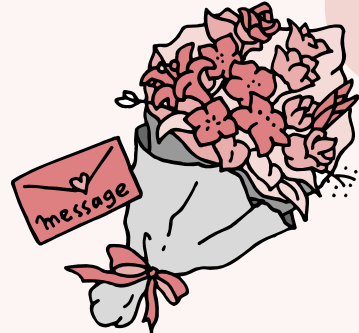
point



メールでも伝わる  
おもいやりの気持ち

お祝い返しという文化。この伝統を現代風にアレンジしてみましょう。いただいた品に義理第一に返礼するのではなく、たとえば旅先での美しい風景写真を添えたメールでのお礼を送ってみては。「あのときはありがとう」の気持ちがこもったお礼はたとえメールでも嬉しいものです。

point



アイテムをそえて  
よりスマートに

より明確に気持ちを伝えたいなら、メッセージカードがおすすめ。カードはあとに残されることが多く、こちらの気持ちも色あせないでしょう。銭別やお祝いにお金を贈る場合には、花束などをそえると仰々しく感じません。アイテム選びも贈り手のセンスなのです。

## COLUMN

### 先祖への感謝の心が生んだ、お中元とお歳暮

わが国独特の習慣といわれるお中元とお歳暮。その原点には、祖先や両親への感謝の気持ちがあるようです。お中元は、祖先の霊をなぐさめる仏教のお盆の行事と、道教の祭日「中元」とが混ざったもので、お盆に集まった親戚縁者にお礼の品をふるまうようになったことがきっかけです。またお歳暮も、他家に嫁いだ者や奉公に出ている者などが年末に帰省するとき、正月のお供えものを持って帰ったことから広まりました。これらが転じて、お世話になった人に感謝の気持ちを込めて品物を贈りあう、現在のお中元やお歳暮に発展していったようです。

電話を使い、お祝い状やお礼状などのグリーティングカードを贈る人も増えてきています。  
贈りものやお返しは、お互いを支えあい、苦楽を分かちあってきた伝統が生み出した、すばらしい文化です。長い歳月とともに私たちの心に育まれてきた、おもいやりの心。これからも大切にしていきたいものです。